

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## The Poetics of "A Litterbug" : Mina Loy's Modernism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 難波江, 仁美, NABAE, Hitomi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1976">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1976</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## “A Litterbug” 詩学—ミナ・ロイのモダニズム

難波江 仁美

There was nothing to seek in this shattered scripture --- nothing to  
write with thought defeated. “Tuning in on the Atom Bomb”<sup>1</sup>

### はじめに

ヒットラーがニュルンベルグ法を制定した 1935 年、Mina Loy (1882-1996) はパリにいた。ユダヤ人を父に持つロイは、身の安全を考えて次女 Fabi を長女 Julien の住むニューヨークへと向かわせた。そして翌年、ロイ自身も住み慣れたパリを去った。ニューヨークの波止場に母を迎えた娘たちはそのやつれた容貌に驚いたという。ロイは、1910 年代にはフローレンスでイタリア未来派の芸術家達と、Mabel Dodge (1879-1962) のサロンで Gertrude Stein (1874-1946)、Alfred Stieglitz (1864-1946)、Carl van Vechten (1880-1960) らと交流を持ち、1916 年にニューヨークに来るやいなや Walter Arensberg (1878-1954) のサロンで前衛詩人として華やかに脚光をあびた。だが、逃げるようにしてやってきたニューヨークは、もはや居心地のよい場所ではなかった。戦争を前に保守化したアメリカはかつての前衛詩人に関心を示すことはなく、彼女も公の場に出ることもなくニューヨークのバワリー地区の雑居アパートで社会の最下層の人々に混じって暮らした。生活のため教育的玩具やランプ・シェードの制作もしてみたが、ビジネスにはならなかった。ただ、困窮状態にあっても彼女の創作意欲は失われることはなかった。彼女はゴミを集めて「コンストラクション」というコラージュ作品を制作し始めたのだ。1951 年には彼女を慕う Joseph Cornell (1903-1972) の尽力で「コンストラクション」の展覧会も開かれた。1953 年に娘たちの住むコロラドに移ってからも、彼女は炭鉱のゴミを拾って創作し続けた。

その頃、ようやくある若い文芸編集者<sup>2</sup>がロイに興味を持ち、彼女の第 2 作で

<sup>1</sup> *Stories and Essays of Mina Loy* (SEML) 289.

<sup>2</sup> 詩人で出版業を営む Jonathan Williams, Kenneth Rexroth のエッセイでロイを知り、出版の話を持ちかけた。ロイは第 1 作 *Lunar Baedeker* を含め自作の詩は持っていなかったが、ウィリアムズが調査収集編纂して出版した。Burke 431 参照。伝記については、Burke の他、Rober L. Conover, Sara Crangle のロイ作品集への序文等を参考にした。

あり最後の詩集となる *Lunar Baedeker & Time Tables* を 1958 年に出版した。<sup>3</sup> “Lunar Baedeker”—「月の光の道案内人」—として心の奥の闇を照らし続ける作品を書いたロイは 82 歳、この第 2 作には回顧的意味合いがあったが、ロイは世界に向かって挑発的な視線を投げ続けていた。裏表紙に載せる写真には注文をつけ、目の部分だけを強調したポートレートを作らせた (Fig.1)。<sup>4</sup>あたかも自身をヴェネチアのカーニヴァルの仮面にして、無名の「顔」を演出してみせているかのようなのである。自作のコラージュに、“Mina Loy, I’m a litterbug.”と署名したいと言ったロイには、自身を無名の浮浪者として位置づけたいという欲求があったのだろう (Burke 429)。「ミナ・ロイ」は彼女固有の名前というよりは、むしろ詩人としての雅号、そしてその実態は「ゴミ野郎」なのである。仮面のように写し出された彼女のポートレートがそれを物語ってはいないだろうか。ホロコースト



(Fig. 1) *Lunar Baedeker & Time-Tables* の裏表紙写真。

の脅威や原子爆弾の衝撃を同時代人として知るロイは、崩壊する世界の姿に憤りを感じたはずだ。この論考は、ロイの未発表の詩やエッセイに、彼女の「ゴミ野郎」の視座を辿ることで、モダニズムのフェミニスト詩人としての側面からのみ論じられがちであったロイを、新たにポスト原爆時代のサバイバリスト詩人（作家）として評価する試みである。

Carolyn Burke が *Becoming Modern: A Life of Mina Loy* (1996) でロイの前衛的な生き方と詩作の斬新さを紹介し、その書評で Marjorie Perloff が「彼女の詩をオリジナルな形で読む」ことを推奨してアメリカの National Poetry Foundation が *Mina Loy: Woman and Poet* (1998) を編纂してから、ロイへの関心はフェミニスト批評の文脈のなかで高まっていった。ノートン版『アメリカ文学史短縮版第 7 版』(2008) には初期の詩 3 編 (“Bracusi’s Golden Bird,” “Parturition,” “Lunar Baedeker”) が、また同『英文学史短縮版第 8 版』(2006) には当時出版されることのなかった “Feminist Manifesto” (1912) が掲載され、ロイは文学史のキャンオンにフェミニスト詩人として位置づけられた。しかし、2011 年には未出版の詩や散文が *Stories and Essay of Mina Loy* として出版され、現在は新たなロイ像

<sup>3</sup> 最初の出版は *Lunar Baedeker* (1923)、当時ロイはニューヨークを去りパリでランプ・シェード店を営み、詩作も続けていた。

<sup>4</sup> 450 部印刷された。Beinecke Rare Books & Manuscript Libraray の Webpage では表紙と裏表紙を見ることが出来る。http://brbl-dl.library.yale.edu/vufind/Record/3530064 参照。

が模索され始めている。<sup>5</sup> かつては、未来派の男性詩人たちの女性蔑視、暴力、そして権威主義、また同時に女性達の未熟性を暴露して一世を風靡していた過激な詩人は、ホロコーストや原爆の時代を生き延びたサバイバリスト「ゴミ野郎」となる。初期の作品における闇の世界の「月の光の案内人」<sup>6</sup>は、後期の「ゴミ野郎」とどのように繋がるのだろうか。

### 1. 変形する「顔」、恣意的「名前」、無名性という属性

“Feminist Manifesto” (1914) は、未来派の創始者 Filippo Tommaso Marinetti (1876-1944) と親しかったロイ自身が体験した女性蔑視への抗議声明文だが、私信として Mabel Dodge Luhan (1879-1962) に送られたもので、ロイはこの「マニフェスト」を “easily to be proved fallacious—There is no truth—anywhere” と、内容の真偽は当てにならないと控えめに書き添えている (qtd. in Walter 669)。とはいえ、女性自身の意識の変革を促すロイの言葉は力強い。女性が「愛人か母親」の二つに分類されるという思い込みを一掃しない限り完全なる表現の自由は女性にはない、と言い切る彼女の叫びが聞こえてくるようである。

The first illusion it is to your interest to demolish is the division of women into two classes the mistress, & the Mother every well balanced and developed woman knows that no such division exists, that Nature has endowed the Compete Woman with a faculty for expressing herself through all her functions. These are no restrictions the woman who is so incompletely evolved as to be unselfconscious in sex will prove a restrictive influence on the temperamental expansion of the next generation . . . She will not have an adequate apprehension of Life. (*Lost Lunar Baedeker* 154) <sup>7</sup>

「性」の現実を認めない女性は未成熟のままだが、それを知る女性、すなわち

<sup>5</sup> 神戸市外国語大学研究班「モダニズム女性詩人」研究会(第1期 2010.4.–2013.3.; 第2期 2013.4.–2014.3.)においてミナ・ロイの発表を最初に行ったのは2010年だが、その後続いてロイの未完原稿の出版や論文集、*Stories and Essays of Mina Loy*, ed. Sara Crangle (2011)が出版された。*The Salt Companion to Mina Loy*, ed. Rachel Potter & Suzanne Hobson (2010) および *Reading Mina Loy's Autobiographies Myth of the Modern Woman*, Sandeep Parmar (2013) は研究論文。後者は、エール大学バイネッキ貴重書・手稿図書館の7箱の手稿をすべて丁寧に辿り、未出版の自伝的詩を論じた最新のロイ研究の集大成である。

<sup>6</sup> 「案内人」としてのロイについては、拙論、「ミナ・ロイ—月の光の案内人—」『神戸市外国語大学外国学研究』81 (2013), 35-53 参照。

<sup>7</sup> 以後、*Lost Lunar Baedeker* (1996)からの引用はLLB96とし、*Last Lunar Baedeker* (1984)からは、LLB84と記す。

自分の身体を熟知している女性は「完全」であり、「何の縛りもなく」自分を「表現する」ことができるという。逆に言えば、ヴィクトリア朝的価値観に縛られた女性は、心身共に「進化する」ことができず、次世代にもよい影響を残すことができない。当然、“LIFE”を総体として捉えることはできない。ロイは因習的な女性観（結婚観や性的体験）を否定する。慣習という呪縛に甘んじてしまえば、本来備わった能力を伸ばして自分を自由に表現することができなくなるからである。自分の身体を知る意識が目覚めた女性は「完全なる女性」として、自分を自由に「表現する能力」を手に入れることができ、男性によって与えられた女性像（「愛人」や「母」）ではない新しいアイデンティティを創造することができる。女性の顔（アイデンティティ）は、創造的な女性の数だけあり得るのである。とはいうものの、目新しくない女性論だと卑下したロイに、ヴィクトリア朝的女性像の相矛盾する側面を垣間見ることができるのかもしれない。しかし、その表現は刺激的である。新聞記事を切り貼りするような大小の文字。下線、ダッシュ、スペーシングは、このエッセイを未来派やキュビズムの絵画のような斬新なものにしている。

“Feminist Manifesto”執筆前後のフィレンツェ時代、ロイはドイツの医師 Bess M. Mensendieck（1866-1959）が開発した女性体操を学んだ（Burke 118, Walter web.）。簡単な動きで体軸を調整する健康体操で、意識的に自分の身体を動かしてコントロールする方法である。おそらくこの経験からロイは、顔面体操—意識的に顔の筋肉を動かすことで顔を活性化し若返らせる美顔術—を思いつく。“Auto-Facial-Construction”と銘打って彼女はビジネスとして提案した。顔の筋肉を意識的に動かし、自由に表情を作り出す方法である。ロイは、“The face is our most potent symbol of personality”（LLB84 283）と語りかけ、「顔」が「個性」を最も如実に表現する部分であると宣言する。この「個性」という言葉の使い方は注意していいだろう。身体（顔面筋肉）を訓練することで、顔の表情を作り、自分の「個性」を自ら作り出す。ロイにとって「個性」とは、個人固有の属性ではなく、社会から押しつけられた性質でもなく、常に自分で演出可能な、そして必要な状況（ビジネスシーン）に応じて変形可能なものであった。「個性」は普遍的なものではなく、社会の関係性の中で自ら作っていくものであり、演出する「個性」＝「顔」はまた新たな関係を生み出していくのである。興味深いのは、この美顔術が社交会の女性や俳優だけでなく、しかるべき地位にある男性にとっての若返りやキャリアアップにも効果的だということだ。ロイにとって男性 vs. 女性、あるいは「女子＝容姿（「顔」）」という紋切り型の考えはありえない。女も男も、さらには社会全体として人間関係がいかに効果的に作り出せるか、そのための「顔」をいかに自由に作るができるかが重要な

のである。1920年、ロイは船で見かけた日本の農民たちについてドッジに手紙を書いている。ヨーロッパでは決してあり得ない「個性」、つまり彼らの“souls and bodies and clothes and customs”のすべてが調和して、ある種の「個性」を全体で作り出している様子に感銘を受けたのである (qtd. in Walter web)。<sup>8</sup> 1人1人の個性を重要視する西洋とは異なり、日本の出稼ぎ農民たちは1人1人の個性を主張しないが、グループとしての「個性」が発揮される。個性とは、関係の中で表出してくるとロイは観察したのであろう。この頃、明らかにロイの視点は、個別の男女の関係から、個を越えたグループ、社会、人種、国のレベルへと広がっていった。社会は閉鎖的なものではなく、メンバーによって関係も個性も変容するのだ。

ロイがこどものために書いた童話、“The Crocodile without any Tail” (*Stories and Essays of Mina Loy*) には、そんな流動的な「個性」のありようが寓意化されている。物語では、ワニを怖がる子ども達の訴えをきいた妖精が、怖さの原因であるワニの歯を抜いてしまうところから始まる。歯を失ったワニ、つまり顔つきが変わったワニは、性質も変わって優しくなる。子ども達もワニが怖くなくなって友達になる。変容した「顔」が新しい関係を作るからである。するとワニ（歯抜け「顔」）が今度は自分を子供達のやさしい「ママ」と同一視して、母親になって人形をあやし始める。このように、環境は欲望のありようも変える。ただ、面白いことに、遺伝的な要素は残る。雨が降ってくるとワニは思わず川の中に飛び込み、抱いていた人形はずぶ濡れになる。人間の母親であればそんなことはしない。では、ビジネスについてはどうか。子ども達は今度は紙でつくった歯をワニにのり付けし、本来のワイルドなワニの「顔」を作って「フリークショー」のような見世物にして稼ぐ。子ども達はワニの「顔」をかえる（＝歯をつける）ことで、ビジネスでの新しい関係を築く。まるでロイの“Auto-Facial Construction”をわかりやすく童話にしたようである。「顔」が変わることで、関係性が代わり、違った「個性」を演じることで違った関係が生まれてくる。お伽噺のようでありながら妙に現実的な説得力のある物語である。そして忘れてはならないのは、6人の子ども達には名前がないことだ。彼らは「1, 2, 3, 4,

<sup>8</sup> ドッジはロイに Frederic W. H. Myer の *Human Personality and Its Survival of Bodily Death* (1903) を送っている。Christina Walter は“Auto-Facial-Construction”がロイのマイヤーへの批判にもなっていると指摘する。“While Myers presumes a stable dualistic subject in whom willful self-expression takes precedence over a distinct body, his focus on telepathic media (from automatic writing to vocal possession) depicts personality as fully dependent on a body to express it. Likewise, while Loy claims that her exercises ‘produce an identity between the conscious will and different muscular centers in the cranium’—implying an autonomous, self-assertive personality—she also states that only the facial image offers the ‘power to communicate [our] true personalities.’” (Walter の引用はエール大学パイネッキ貴重書・手稿図書館図書館所蔵の書簡)。web. “Modernism Lab” 参照。

5, 6」と番号で呼ばれる。名前は便宜的な記号にすぎない。「個性」＝「顔」は状況によって変わるのであり、普遍的な属性としての「個性」＝名前などはない。

ロイの「個性」への不信は、イギリス人の母とハンガリー移民でユダヤ人の父を持つ混血というアイデンティティの不確かさに起因することもある。彼女が活躍の場を見いだしたのはコスモポリタンで知的な都市空間、そこでは外観の美しさ、言語能力の巧みさ、芸術性、斬新さなどが判断基準であり、ロイはそこで見事に才能を発揮した。だが時として、生来の人種的曖昧さはロイを不安に陥れたかもしれない。「尻尾のないワニ」のワニが、歯を抜かれても尻尾を噛みちぎられても、ワニであるように、ロイも生まれついた生物学的属性（ユダヤとアングロサクソンの血）を完全に抹消することはできない。ただ、自分を滅却し、「顔」という仮面を効果的に演出するというアートだけが、そのアイデンティティの不安を乗り越える方法だったのである。

## 2. “Gertrude Stein”—母語を異化する

1914年から25年頃に書かれた作品に、“Gertrude Stein”という詩がある。

Curie  
of the laboratory  
of vocabulary  
she crushed  
the tonnage  
of consciousness  
congealed to phrases  
to extract  
a radium of the word (LLB84 26)

「フレーズに凝固された意識を粉々にして、そこから言葉の光（ラジウム）を引き出す」—言葉のサイエンティストとしてのスタインの偉業をロイは、鉱石からラジウムを抽出してノーベル賞を受賞したキュリー夫人に喩える。句読点はない。言葉が光を放つように漂っている。ロイはスタインの革新性はノーベル賞に値するほどだと考える。1927年、ロイはパリの Natalie Barney (1876-1972) のサロンで“Gertrude Stein”と題した講演を行い、スタインの文体を知るためには、その言葉の流れに共感しなければならないと語った。そして、ベルグソンを引いてスタインのテーマを持続的な“Being”だと指摘した。

The flux of Being as the ultimate presentation of the individual, she endows with the rhythmic concretion of her art, until it becomes as a polished stone, a bit of the rook of life—yet not of polished surface, of polished nucleus. (LLB 84 290)

スタインは究極の「個」として顕現する“the flux of Being”をリズムカルに提示し、最後にその根幹にある“nucleus”を抽出する。そのとき、同時に関連のないように見える言葉がまき散らされるという。

... a goodly amount of incoherent debris gets littered around the radium that she crushes out of phrased consciousness. (294)

“radium,” “crushes,” “consciousness”は、先にあげた詩“Gertrude Stein”にも使われた言葉である。ロイはスタインを語りつつ、自分の詩にも言及する。言葉のエッセンスを抽出するスタイン、そのスタインに共鳴するロイ—ロイは、スタインと一つになって語るのである。語るロイと語られるスタインの主客の距離が消え、意識の流れの渦が混じりあう。ロイは蜥蜴の描写を例にあげる。

To interpret her description of the lizard you have to place yourself in the position of both Gertrude Stein and the lizard at once, so intimate is the liaison of her observation with the sheer existence of her objective, that she invites you into the concentric vortex of consciousness involved in the most trifling transactions of incident. (295)

何気ない日常の出来事と言葉との関係においても、それを捉える意識の動きは「渦巻」に喩えられるほど感覚を揺さぶるものであるはずである。スタインがその渦巻く様を自らが感じ取る時間の流れの中に再現したとすれば、先に引用したロイの詩は、その渦巻きが残した滓、光ったラジウムの瞬間をカメラに収めるように捉えたものである。ただ一般の読者にはその光が日常の塵や汚物“excrescence” (293) で曇ってしまって、その流れも震動も、光の波も見えない。だからこそロイは読者に意識の革新を促す。

Like all modern art, this art of Gertrude Stein makes a demand for a reactive audience, by providing a stimulus, which although it proceeds from a complete aesthetic organization, leaves us unlimited latitude for personal response. (297)

スタイン文学は有閑階級や耽美家たちではなく、すべての人間に美を体験してもらいたいがために書かれたものであり、その点ピカソと同類という。彼らは共に美や芸術を大衆に解放し、民主化する運動（「渦巻き」）を起こした。

The flux of life is pouring its aesthetic aspect into your eyes, your ears—and

you ignore it because you are looking for your canons of beauty in some sort of frame or glass case or tradition. Why not each one of us, scholar or bricklayer, pleurably realize all that is impressing itself upon our subconscious, the thousand odds and ends which make up your sensory every day life?

Modernism has democratized the subject matter and *la belle matière* of art . . . and Gertrude Stein has given us the Word, in and for itself. (298)

ロイのスタイン論はまさに“Modernism Manifesto”と呼べるだろう。そして言うまでもなく、ロイはスタインという個性を語ろうとしているわけではない。スタインは、“flux of Being”という根源的性質を言葉で伝える媒体（メディア）、つまり“the Word”のエッセンスを抽出して取り出す言葉の科学者なのだ。そして日常では気付くことのない意識の「渦」を意識化させるべく言葉に磨きをかけ、ラジウムを光らせたキュリー夫人のように、スタインは「言葉」から「存在」の「核」を光らせる。慣例化し形骸化した言葉を異化し、母国語を外国語のように新鮮に響かせるのである。その異化作用にこそロイのいうモダニズムの真髄がある。

新たに出版されたエッセイの中にも“Gertrude Stein”と題された短文がある。ロイはスタインが多くのアメリカの作家の指標となり彼らに「勇気」を与えたことを協調する。「20年前」には「賢い雑誌」の「いじめ」もあったが、スタインこそ言葉を異化し活性化した“the all-American pioneer!”である。

I doubt any of her writings has appeared in French, especially as the essential feature of her work is its untranslatability into even its own language. For our obliging pioneer has reduced the English language to a foreign language ever for Anglo-Americans. (SSML 234)

スタインは、英語を母語とする者にも翻訳不可能な英語、つまり英語を外国語にした。スタインは、言葉のフロンティアに挑み、常に言葉を組み替え、新しい言語体験を可能にした。先にあげた1927年のバーニー宅での講演では、ジャーナリズムの有害な影響に洗脳された一般人にはスタインの純化された言葉は通じないが、“the man on Mars” (291)には通じるとロイは皮肉っていた。一般人はまず三面記事的なレベルでユダヤ人であり同性愛者であったスタインへの偏見から、スタインの功績を正当に評価できず「いじめ」た。思えば、キュリー夫人も1911年に2回目のノーベル賞を受賞したが、フランスではキュリー夫人がユダヤ人だという噂がたち、さらに女性への偏見と他の研究者との不倫関係が取りざたされて、アカデミーは夫人を会員として迎え入れなかった (Walter 673)。だが何より仕事を続けた彼らをロイは評価する。スタインの偉大さは、

「いじめ」を達観し、「笑み」を浮かべてさえいたことにある (233)。いじめを受けて卑屈な「顔」をすれば、そういう人間関係を作り出す。スタインの「笑み」は、時代を超越した精神性を現している。

スタインの言葉は未来に向けて発せられ、文明のフロンティアをめざす。だからロイは彼女をアメリカ的、デモクラティック、モダニストと呼ぶ。スタインのパイオニア精神は、一つの言語、一つの人種、一つの性によって規定され形骸化した慣習を打破し、すべてを異化するところにある。旧約聖書の時代から使われてきた言葉に新しい生命を与えたのである。曇って汚れたような言葉を拾い集め、エマソンの表現を借りれば、「化石」(“fossil”) となった言葉から生命力を引き出したのだ。世界大戦で世界が瓦礫化していく中、難民や浮浪者たちに混じって暮らしたロイにとって、このスタインの時空を超越したパイオニア精神(=笑い=顔)は何よりも彼女に再生への希望と創作を続ける「勇気」を与えたに違いない。

### 3. “Atom Bomb”—<sup>レフューズ</sup> 廃墟・<sup>レフュジー</sup> ゴミ・難民

1931年～1946年までロイは詩を全く発表していないが、1941年にアメリカが第二次世界大戦に参戦した頃から再び詩を書き始めていたようだ。“America a Miracle” (1941) は、“America is a miracle . . . you are a flash of lightning, a stroke of genius” (LLB 227) と始まるアメリカ賛歌。ベルやモースなどが発明した通信手段はアメリカを世界の“Good Neighbour”にした、そして“Humanity / of Liberty”を約束したリンカーンの国アメリカは、世界の“Supremacy”と呼ぶに相応しい立場にあり、“the mechanized monster”に対抗すると語る (LLB84 229, 230, 231)。「機械化されたモンスター」は、世界を震撼させるファシズムやナチズムのことであろう。ロイにとって、ヨーロッパにおける惨状は他人事ではなかった。多民族国家アメリカへの期待をロイがこのように詩に謳ったとしても不思議はない。

“Photo After Pogrom” (1945) では、積み上げられた死体の山に放られた女性の死体に焦



Fig. 2 “Photo After Pogrom.” Yale University Library Beinecke Rare Book and Manuscript Library HPより転載。

点が当てられる。それは「すべてを剥奪された/究極の笑み」(“the absolute smile / of dispossession”)を浮かべている。そして最後の4行、黙された死体の非情な風景が広がる。

The purposeless peace

Sealing the faces

Of corpses –

Corpses are virgin . (LLB84 213)

「ポグロム」(ホロコースト)後の風景に、詩人は放置された死体を凝視する。この詩のタイプ原稿(バイネッキ貴重書・手稿図書館 HP に公開)を見れば、単語と単語の間や句読点の前にスペースが意識的に入れられているのがわかる(Fig. 2)。沈黙する無の空間がこのスペースによって視覚化される。そして死体の山は、濫用され浪費された身体は無名性と無用性を無言で訴える。ロイは、その死体の山のゴミ化したマテリアリティの存在感を無視することができない。同時代のモダニスト女性詩人ムアーが、同じように戦争をテーマとした詩、“In Distrust of Merits”(1944)最終行を、“Beauty is everlasting / and dust is for a time.”と結んだ希望的楽観とは対照的である。ロイはこの詩においても徹底して非情な語りで死体と瓦礫のマテリアリティに拘る。ただ最後に使われる“*virgin*”という一語に、無駄死にした若い女性(母となって次の生命を宿すことのできる)の無念をロイが込めたように思う。スペースをあけて打ちこまれたピリオドは、言葉との関連性を断ち切れ、空虚な無の点となってしまっている。

同じく1945年の“Time-Bomb”では、これまでにない大きな破壊行為による「爆発」の瞬間が凝縮され、無と化した風景が映し出される。ここでは「ポグロム」が訴える特定グループの殺戮を越えている。破壊行為は、人類の文明の歴史、過去から未来へと途切れなく続いてきた人類の進歩をすべて無に帰す。現在は過去からも未来からも分断され、孤立し、意味を消失する。

The present moment

is an explosion ,

a scission

of past and future

leaving

those valorous disreputables ,

the ruins ,

sentinels  
in an unknown dawn  
strewn with prophecy .

「今このとき」は「爆発」、「過去」と「未来」から「分断」し、「廃墟」や「歩哨」が「まき散ら」される。言葉と言葉との間に広がるスペース、浮いたような句読点、すべてが「分裂」によってバラバラになった風景を視覚的に表現する。そして最後の4行は「爆発」が引き起こした風景。

Only the momentary  
goggle of death  
fixes the fugitive  
momentum . (qtd. Miller 194) <sup>9</sup>

その風景は「死」の「ギョロ目」(“goggle”)だけが捉えることのできる凍り付いた死の瞬間である。Christanne Miller は、アングロサクソンの響きを持つ“goggle”という言葉が他のラテン語源の言葉の中に置かれていることに注目し、しかもそれが唯一の行為動詞“fix”の主語であることを指摘して、「死のギョロ目」の見つめる生命不在の静止した風景の恐ろしさが際だつという(195)。さらに、破裂音[g], [d] (1.2) から摩擦音[f], [f] (1.3)、そして鼻音[m], [m] (1.4) へと音を繰り返して展開することで、爆発、火炎の燻り、そして沈黙という一連の流れが効果的に短い一文に凝縮され響いている。空白にぽつんと打たれたピリオドは、風景の空虚さと無意味さを視覚的に訴える。

“Turning in on the Atom Bomb” (*SE of ML* 286) では、語り手が“Eccentric guilt!”と叫んで、瓦礫化した風景の責任を背負い込む。

My usual warm appreciation of the concrete world disintegrated in a global  
disappointment -- -- continued in endless chainreaction of terror transpiercing  
me. (287)

原爆投下は「具象世界」の完全崩壊という危機感をもたらした。キュリー夫人のラジウム発見は、皮肉にも人類に破壊「力」(“force”)を与えることになり、「恐怖」の「連鎖反応」を引き起こした。直接爆弾を作った訳ではないとしても、ロイは時代の共犯者として「偏心的罪悪感」を感じるのだ。心の抛り所を

<sup>9</sup> Conover 編の作品集は *LLB84*、*LLB96* とも、手稿にあるスペーシング等を反映していないので、Miller の引用を参考にした。

求めて思わず聖書を紐解いても、そこに答えはなく、彼女の「打ちのめされた思考」(“thought defeated”)からは何も生まれない。

For weeks, I resisted, a misery so mysteriously baseless, slowly reducing to  
tremulous fear the terror that appeared to invade me from something endlessly  
surrounding me—till it faded to the annoyance of neurosis - - - - - this  
lessening (289)

エッセイの終わりはダッシュとハイフン。ピリオドもない。自分を取り囲み侵犯してくる「恐怖」が精神に影響し、世界のすべてが縮小していく。世界の崩壊と縮小に反比例して恐怖は増大する。物質世界の消滅は、語る対象の消滅であり、言葉は必然的に力を失う。

ロイがゴミを拾って制作したコラージュ、“Christ on a Clothesline”は、“Time-Bomb”で描かれた「ギョロ目」を想像させる作品である (Fig. 3)。<sup>10</sup>キリストは十字架ではなく洗濯ヒモに吊され、ギョロ目でこちら凝視する。ロイはニューヨークのバワリー地区に住む浮浪者たちに混じって暮らしたが、このキ



Fig. 3 *Christ on a Clothesline*, ca. 1955-59. Collage and mixed media in deep glass covered box.  
24 x 41 ½ x 4 ¼ inches. Francis M. Nauman Fine Art.

リストのモデルもロイが目にした浮浪者だ。“Hot Cross Bum” (1949) では、泥酔し行き倒れとなった彼ら (社会のゴミ) の揺れる身体と宇宙の鼓動との共鳴をロイは描いている。浮浪者もキリストも同じ宇宙の生命体として共に命綱に吊られ、揺れているのだ。<sup>11</sup> 当然ロイは、浮浪者たちを弱者とは言わない。“Universal Food Machine”は、「どこから来てどこへ行くのかも分からない無名の

<sup>10</sup> ニューヨークにある Francis M. Naumann ギャラリーは、2006年に“Daughters of Dada”と題する特別展を主催している。言及したロイのコラージュはこの HP から転載させていただいた。  
<http://www.francisnaumann.com/daughters%20of%20dada/loy.html>

<sup>11</sup> “Hot Cross Bum”については、拙論「ミナ・ロイ一月の光の案内人」(『神戸市外国語大学外国語学』81巻) 参照。

輩たち」(“anonymous creatures who seem to come from nowhere and to be going nowhere”)に「ラジエーター」で暖かくしたシェルターを与えよと訴える (*SE of ML* 290)。浮浪者たちは「怠惰」なのではなく、“a paralysis of the nervous system resulting from blind education” (291)、つまりしかるべき教育が為されていないだけだという。<sup>12</sup>そして心身の「腐敗」(“decomposition”)を防ぐためにはキリストの教えにも叶った「倫理的解読剤」(“an ethical antidote”)が必要という。

Therefore when Christ commanded us to do unto others as we would that they should do unto us, it was as a primary measure of spiritual hygiene. (292)

「洗濯ヒモのキリスト」に明らかのように、社会のゴミと見なされる泥酔した浮浪者も、しかるべく洗濯(解毒)すれば覚醒し、「キリスト」の目で世界を見る。この洗濯という解読剤は、現実を見るための「精神衛生」方法である。ここでロイはあくまで、現実を見据えるための「目」に拘る。宗教的改心ではなく、精神性の進化にロイは期待する。磔刑のキリストは天を仰ぐが、ロイの「洗濯ヒモのキリスト」は地上の我々にその「ギョロ目」を向けるのだ。

宗教と言えば、ロイはクリスチャン・サイエンスに傾倒していた。アメリカ人女性 Mary Baker Eddy (1821-1910) を創始者とするこの新興宗教は、当時の知識人たちにとっては宗教というよりも精神哲学、あるいは精神分析の代替物として歓迎されたという。ロイはフィレンツェ時代、ユダヤ人のガートルードやレオ・スタインと共にクリスチャン・サイエンスの礼拝に参加していた。ニューヨークでは、唯一親しくしたアッサンブラージュ作家 Joseph Cornell が熱心な信者でもあった。おそらく、人種を越え異質な背景を持つ知識人たちに開かれた宗教としてクリスチャン・サイエンスは機能したのであろう。Burke が“the one spiritual practice that promised to bridge the gaps between mind and body, Judaism and Christianity, the commercial and the saved” (131) と論じているように、ロイにとってクリスチャン・サイエンスは相反するものを一つに繋ぐ世界宗教に他ならなかった。<sup>13</sup>また人種混濁は当時優性遺伝的には負の要素として敬遠されたが、ロイは混血にこそ世界平和への鍵があると考え、“the genius of mixed race has inevitably a roundness of understanding of humanity at large than one who has a specialized race memory”とあるように、混血によって人間性が深まり、理解が広

<sup>12</sup> “The Artist and the Public”の冒頭にも同様の記述がある：“The only trouble with *The Public* is education” (*LLB* 285).

<sup>13</sup> Lara Vetter は、バイネッキ貴重書・手稿図書館にある未出版のロイの草稿 (Mina Loy Papers; series II, box 7, folder 189) にこの記述があると指摘する (55)。クリスチャン・サイエンスについては、Tim Armstrong の“Loy and Cornell: Christian Science and the Destruction of the World,” *The Salt Companion to Mina Loy* にも詳しい。

がる、さらに偏りのない普遍的な「人類の記憶」を継承して進化の過程を推し進めることができると考えた (qtd. in Vetter 56)。<sup>14</sup> そうであれば、「どこから来たのかわからない」無名のニューヨークの浮浪者をモデルとしたロイのキリストは、人種混淆、瓦礫化した街を凝視し、その現実を「人類の記憶」として覚える者だといえよう。

アメリカ空軍による原爆投下は、世界に恐怖の連鎖反応を引き起こしたが、1946年、ロイはアメリカ国籍を取得した。ロイにとってアメリカは“America a Miracle”で謳ったようにリンカーンの国、移民の国、「人間性」と「自由」を目指す国として、難民達のための唯一の避難所でなければならなかったのである。

#### 4. モダニズムと「ゴミ野郎」

1916年にニューヨークに現れ、現代詩の先陣を切ったロイを Ezra Pound はアメリカ人だと思い込み、ムアーとウィリアムズとロイの三人を読むに値する現代アメリカ詩人だと考えていた。特にロイの詩を“logopoeia”、すなわち“dance of the intelligence among words and ideas”<sup>15</sup>だと高く評価した。しかし、彼女の詩には挑発的言葉が頻発し、Kenneth Rexroth も「誰も彼女の詩を読まない」と認めていたし、Amy Lowell に至っては、不謹慎なロイの詩 (“Love Song”) を掲載した雑誌 *Others* の支援を断ち切ると言ったという (Burke 191)。このようにアメリカのモダニスト詩人と言われている人々の間でもロイの評価は分かれていた。ただ、ロイは性的モラルを覆そうとしていたわけではない。彼女はどこまでも表現において前衛的でありモダンであることを追求したのである。

Roger Conover によれば、パリ時代、ロイは実在しないという噂がたったが、ナタリー・バーニーのサロンにやって来たロイは、「匿名」でいるために「詩人」という匿名を使っているのだと弁明したという。

I assure you I am indeed a live being. But it is necessary to stay very unknown . . . To maintain my incognito the hazard I chose was—poet. (LLB 94 xii)

ロイは幾つもの「顔」を持ち、生きるために創作を続けた。絵、詩、ランプ・シェード等のクラフト、教材、コラージュと、様々な仕事に従事した。パウンドの唱えた “Make It New” がアメリカン・モダニズムの定義の一つとすれば、

<sup>14</sup> 言及の文書は、同じくバイネッキ貴重書・手稿図書館所蔵の Mina Loy Papers; series II, ox 7, folder 191 (Vetter 56).

<sup>15</sup> Ezra Pound, “Marianne Moore and Mina Loy,” review of *Others* [1917], *Little Review*, March 1918; rpt. in *Ezra Pound, Selected Prose 1909-1965* (New York: New Directions, 1973), 424.

まさにそれを日常に実行したのがミナ・ロイであった。しかし第二次大戦後の晩年、西洋文明存続への危機感、難民、食糧難など、人間の無名性と無力さを彼女に痛感させる状況が続いた。自らを「ゴミ野郎」と称し、ゴミを作品へと甦らせたロイの芸術観は、サバイバルが重要課題となったポスト原発時代の今、創作活動が向かうべき方向に啓発的な光を投げかけているように思われる。

## 参考文献

- Armstrong, Tim. *Modernism, Technology, and the Body: a Cultural Study*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press, 1998.
- Burke, Carolyn. *Becoming Modern: The Life of Mina Loy*. Berkeley: University of California Press, 1996.
- Goody, Alex. *Modernist Articulations: a Cultural Study of Djuna Barnes, Mina Loy and Gertrude Stein*. Houndmills, Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, 2007.
- Jameson, Fredric. *A Singular Modernity: Essay on the Ontology of the Present*. London & New York: Verso, 2002.
- Jay, Martin. “Modernism and the Specter of Psychologism.” *Modernism/Modernity* 3.2 (1996) : 93–111.
- Kinnahan, Linda A. *Poetics of the Feminine : Authority and Literary Tradition In William Carlos Williams, Mina Loy, Denise Levertov, and Kathleen Fraser*. Cambridge [England]: Cambridge University Press, 1994.
- Kouididis, Virginia M. *Mina Loy, American Modernist Poet*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1980.
- Loy, Mina. “Auto-Facial-Construction.” *The Lost Lunar Baedeker*. 165–66.
- . “Christ on a Clothesline.” ca.1955-59. “Daughters of Dada: June 8-July28, 2006.” Francis M. Naumann Fine Art. Web. 16 June 2014.
- . “The Feminist Manifesto.” *The Lost Lunar Baedeker*. 153–56.
- . and Elizabeth Arnold. *Insel*. Santa Rosa: Black Sparrow Press, 1991.
- . *The Last Lunar Baedeker: Poems of Mina Loy*. Charlotte, N. C., : The Jargon Society, 1984.
- . *The Lost Lunar Baedeker*. Ed. Roger Conover. New York: Noonday, 1996.
- . and Sara Crangle. *Stories and Essays of Mina Loy*. Champaign [Ill.]: Dalkey Archive Press, 2011.
- . Maera Shreiber, and Keith Tuma. *Mina Loy : Woman and Poet*. Orono, Me.: National Poetry Foundation, 1998.

- Miller, Tyrus. *Late Modernism : Politics, Fiction, and the Arts Between the World Wars*. Berkeley: Univeristy of California Press, 1999.
- Parmar, Sandeep. *Reading Mina Loy's Autobiographies : Myth of the Modern Woman*. London; New York: Bloomsbury, 2013.
- Perloff, Marjorie. "English as a 'Second' Language: Mina Loy's 'Anglo-Mongorels and the Rose.'" *Poetry on & off the Page: Essays for Emergent Occasions*. Evanston, Ill.: Northwestern University Press, 1998.
- . "The Mina Loy Mystereis: Legend and Language." Marjorie Perloff Website. <http://marjorieperloff.com/reviews/loy-mysteries/>
- Ezra Pound, "Marianne Moore and Mina Loy," review of *Others* [1917], *Little Review*, March 1918; rpt. in *Ezra Pound, Selected Prose 1909-1965*. New York: New Directions, 1973.
- Walter, Christina. "Feminist Manifesto and Auto-Facial-Construction." The Modernism Lab at Yale University. 2010. Web. 25 July 2010. <[http://modernism.research.yale.edu/wiki/index.php/Feminist\\_Manifesto\\_and\\_Auto-Facial-Construction](http://modernism.research.yale.edu/wiki/index.php/Feminist_Manifesto_and_Auto-Facial-Construction)>
- . "Getting Impersonal: Mina Loy's Body Politics from 'Feminist Manifesto' to Insel." *Modern Fiction Studies* 55.4 (Winter 2009) : 664–92.
- Woolf, Virginia. "Street Haunting: A London Adventure." 1930. *Collected Essays: Vol. IV*. Ed. Leonard Woolf. London: Chatto & Windus, 1967. 155–66.
- Vetter, Lara. "Theories of Spiritual Evolution, Christian Science, and the 'Cosmopolitan Jew': Mina Loy and American Identity." *Journal of Modern Literature* 31.1 (Fall 2007) : 47-63.
- 難波江仁美。「ミナ・ロイ一月の光の案内人」『神戸市外国語大学外国学研究』81 (2013) 35-53